

40.8.12

# No. 604

## 一、夏まつり たいなわ

### ★天狗まつり

——弊城市小名浜

福島県小名浜、ここは古くから漁港として栄えてきました。弊城市が新産業都市に指定された今日、小名浜港は遠洋漁業、国際貿易港、そして石油コンビナートと第二の横浜をめざしています。

だがこれも昔から伝えられているめおと天狗のおかげと、市ではこの世紀をこえた二体の天狗の再会を祝福し、天狗様の持つ超人的な力にあやかり、海陸安全、大漁豊作を心から祈願して第一回天狗祭がはなやかに行なわれました。

### ★ねぶたまつり

——青森

一方こちらは東北の三大祭りの一つ、青森のねぶた祭り。ねぶたは青森の夏を象徴する祭りです。

坂上田村麿呂に源を発するというこの山姥ある祭り、大きなねぶたを持ち上げ勇壮な場面を今もなお展開しているのです。祭りもたけなわ青森ッ子は三日に渡り街にくり出し、夏の夜長を陽気に踊りまくるのです。

## 一、ヒロシマの願い

——原爆二十周年

あの「悪夢」から二十年の歳月が流れたヒロシマ。ことしもあのいまわしい八月六日がめぐってきた。広島市平和公園前では、市民たちが、黙とうをささげ、原爆犠牲者のめい福を祈り、世界平和の願いを新たにしたい。

だが、広島には、いまだに「原爆症」の恐怖と闘う多くの被爆者がおり、その数実に九万三千人いる。

二千戸あまりもあるという、被爆者部落。そのなかに住む中村さん親子もその一人。十五年前母親は原爆症で死亡し、それから父親も発病。生ける死かばね同様の生活をつづけてきた。当時幼なかった容子さんはいつしか二十六才。昼間は、おみやげ品を作る小さな工場で働き、夜は夜で、また働くという重労働の明け暮れ。

こうして中村さんは不治の病い「十字架」を背って、生きつづけているのです。同時に、いつ我が身を襲うかも知れない暗い「十字架」を背って、生きつづけているのです。

22P

AV

200